

2022年4月10日（日）「食べて満腹した人々」

ヨハネ 6:1-15

1 その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。2 大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。3 イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。4 ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。5 イエスは目を上げ、大勢の群衆がご自分の方へ来るのを見て、フィリポに言われた。「どこでパンを買って来て、この人たちに食べさせようか。」6 こう言ったのはフィリポを試みるためであって、ご自分では何をしようとしているか知っておられたのである。7 フィリポは、「めいめいが少しずつ食べたとしても、二百デナリオンのパンでは足りないでしょう」と答えた。8 弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。9 「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、それが何になりましょう。」10 イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。その場所には草が多かった。それで、人々は座った。その数はおよそ五千人であった。11 そこで、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。12 人々が十分食べたとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、余ったパン切れを集めなさい」と言われた。13 集めると、人々が大麦のパン五つを食べて、なお余ったパン切れで、十二の籠がいっぱいになった。14 人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来るべき預言者である」と言った。15 イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、独りでまた山に退かれた。

#### 【序論】

今年は3月2日から受難節に入り、来主日（4月17日）にはいよいよ復活日（イースター）を迎えることとなります。この、およそ一ヶ月半に亘る期間を、教会では主イエスの受難に備える時として歩みます。今日は「棕櫚の主日」と呼ばれる日曜日であり、主イエスが十字架という最終地点を目指してエルサレムに入城されたことを記念する日です。エルサレムの群衆が歓呼の声をもってロバの子に乗ったイエスを迎える。その一方では、ガリラヤからエルサレムまで着いてきた群衆もいたようです。両者の歓声がこだまし合うかのように、イエスへの「新しい王」としての期待が加熱していました。この「群衆とイエス」の関係、両者の認識の違いに注目しつつ、「五千人の給食」の記事を通して御言葉に耳を傾けたいと思います。

「棕櫚の主日にどうして五千人の給食？」と思われるかもしれませんが、この「共同の食事」が実は主イエスの受難を象徴していたという視点に立つならば、そしてそこには共通する「群衆」の存在があったとするならば、この箇所から語る意味をご理解いただけることでしょう。

## 【本論】

### 本論 1. 群衆の思い

その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。(6:1-2)

講解説教ではないので詳細は省きますが、ヨハネ福音書のここまでの流れでは、4章でカペナウムの役人の息子の癒し、5章でベテスダの池の病人の癒しという出来事がありました。これらの御業は賛否両論を巻き起こし、主イエスは民衆からは支持を得ましたが、律法学者からは安息日規定を破ったという廉で目をつけられるようになりました。イエスの著しい御業を見た人々は、ある期待を胸にゾロゾロと着いて行きました。並行記事であるマタイ 14 章には、「イエスはこれを聞くと、舟に乗ってそこを去り、独り寂しい所に退かれた。しかし、群衆はそれを聞いて、方々の町から歩いて後を追った」(14:13)と書かれています。少し休息を取りたくて誰にも分からない場所へ退いたというのに、そうはさせまいとどんどん人が集まって来たというのです。携帯電話もなければ車もない時代であるのに、彼らはどうにか連絡を取り合い、噂を聞きつけ、徒歩で追いかけて来ました。しかも、時刻は遅くなってきていたようですから、彼らがほとんどなりふり構わず出かけてきたことが窺えます。仕事や家庭はどうするつもりだったのでしょうか。

イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。(6:3-4)

山で教える姿は「山上の説教」を思わせます。座って教える姿勢もラビとしての権威を表すようです。ヨハネ福音書の強調点は「過越の祭」であり、主イエスが「過越の小羊」として屠られたことが読者に理解できるように書かれています。過越の祭はユダヤ暦でニサンと呼ばれる月(太陽暦では3～4月頃)の14～21日にかけて行なわれた祭であり、かつてエジプトで奴隷生活を強いられていたイスラエルの民が贖われた日を記念する重要な祝日でした。巡礼のためにエルサレムに集まってきたユダヤ人たちは、ニサンの月の14日に家ごとに一匹の小羊を屠り、その肉を全家族で食べました。ここにさりげなく「ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた」と書き添えられているところに、

著者ヨハネの意図が現れています。つまり、「これから主イエスがなさるパンの奇跡は、過越の食事を連想させるものだよ」と言われているのでしょ

う。さて、まずここで私たち読者はよく読み取らなくてはなりません。それは群衆がイエスに対してどのような期待を寄せているかということです。彼らの行動は当時のユダヤ人が持っていた思想と大きな関わりを持っていると思われま

す。中間時代に発展した黙示思想では、民が異教徒から迫害を受ける度に、世の終わりに現れるメシアによってイスラエルの敵が一掃されるという信念が文書に書き記されました。その文書の特徴として、そのことが既に行なわれたかのように過去形で記される傾向があ

った。この文学形式はヨハネの黙示録にも大きな影響を与えています。この時代にイスラエルを苦しめていたのはユダヤを属州としているローマ帝国であり、その強大な力の前に民は屈服せざるをえず、帝国に納める税金によって民衆は苦しめられていま

した。後で出てくる「大麦パン」というのは、パレスチナでは非常に安価な食材であり、通常は家畜に与えられるもので、非常時にのみパンを造るために用いられたものです。少年が持ち合わせていたパンというのは、この群衆の「貧しさ」を表しているとも言えるでしょう。この屈辱的な生活から民を贖い出してくれるメシアがもう間もなく現れるに違いないという期待が渦巻いていた。だから、群衆はそれと思しき人物が現れると我を忘れて追いか

け回し、自分たちの王に仕立て上げようとしたのです。彼らの思惑がそういうところにあつたとするならば、もしイエスとその「政治的メシア」であるなら、即刻審きが行なわれるはずだから、もはや仕事などしている場合ではないという地に足の着いていない考えが根底にあつたと思われま

## 本論 2. イエスの思い

イエスは目を上げ、大勢の群衆がご自分の方へ来るのを見て、フィリポに言われた。「どこでパンを買って来て、この人たちに食べさせようか。」こう言ったのはフィリポを試みるためであつて、ご自分では何をしようとしているか知っておられたのである。フィリポは、「めいめいが少しずつ食べたとしても、二百デナリオンのパンでは足りないでしょう」と答えた。(6:5-7)

十二弟子の中で「フィリポ」という人物が名指しで出てくるのは大変珍しい。ヨハネによるこの時の描写は非常に詳細であり、この出来事が事実であることが豊かに示されています。この時になぜフィリポに問いかけられたかということ、それはおそらく彼がベトサイダ出身であつたので(1:44)、この地域の買い物事情をよく把握していたからでしょう。また、弟子たちのコミュニティの中で執事的な役割を果たしていたのかもしれま

せん。ここにいた群衆の数は男性だけで5千人であり、女性や子どもを含めると1万人を超えたと思われます。彼はそこからざっと試算し、これだけの人数に食べさせようと思ったら少なくとも「二百デナリオンのパン」が必要だと答えました。この時代、1デナリは労働者の平均日給でしたから、単純計算で10,000円だとすると、200万円。つまり、一人当たり200円あればパンを2～3個食べられると考えたことになるでしょう。

もちろん、主イエスはそのような答えを求めていたわけではありません。そんなお金をポンと用意できるはずもなく、誰かがわざわざ山を降りて買って来るわけにもいきません。現実には不可能なことを問うているのです。「不可能です」という答えが想定されていた。更に言えば、主イエスに頼ることが求められていた。

**弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、それが何になりましょう。」(6:8-9)**

貧しい少年がたまたま持ち合わせていたお弁当があった。この少年の偉いところは、それをこっそり隠し通し、一人腹を満たすこともできたにも拘らず、それを主の御前に差し出したということです。主はこのパンと魚を祝福されました。

**イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。その場所には草が多かった。それで、人々は座った。その数はおよそ五千人であった。(6:10)**

ここでも描写が大変具体的です。「草が多かった」ということなど書き残す必要もなさそうなところですが、ヨハネは当時の情景を生き生きと思い出しながら綴っている。「座れ」と言われても座りにくかったのかもしれませんが。

**そこで、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。(6:11)**

パンを取り、祈り、分け与えるという一連の行為は、一家の家長が行なうことでした。主は「イスラエルの父」のような思いでこのことをしておられるのでしょうか。この群衆を愛しておられた。豊かに恵みで満たしてあげたいと思われた。そして、事実分けられたパンは不足することなく、すべての人に行き届きました。

さて、「パンを分け与える」という行為から私たちが容易に想像できるのは、聖餐式でしょう。聖餐式では、十字架上で主イエスの肉が裂かれ血が流されたことを表すため、裂かれたパンとぶどう酒が分け与えられます。このことは「最後の晩餐」の席で、弟子たちとの契約の儀式として具体化されることとなりますが、この「五千人の給食」は、実はこの恵みを先取りしていたのです。主イエスはおびただしい群衆に、ご自分のいのちを与えたいと願っておられた。このパンは確かに飢えた群衆の腹を満たすものでありましたが、主イエスは彼らの魂を満たしたいと考えておられたのです。

本論3. 主の思いを悟れなかった人々

人々が十分食べたとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、余ったパン切れを集めなさい」と言われた。集めると、人々が大麦のパン五つを食べて、なお余ったパン切れで、十二の籠がいっぱいになった。(6:12-13)

1万人の群衆が満腹するまでパンと魚を食べました。大麦のパンがどういう質のものであるか、現代の日本人が知りうるものとはずいぶん違ったのではないかと思います。形の崩れやすいものだったので、そこかしこにパン屑が散らばっていた。お皿もなかった。主はそのパン屑さえも無駄にならないように集めなさいとお命じになりました。これは、旧約聖書で教えられている「畑のものを刈り入れるとき、隅まで刈るな」(レビ23:22)という戒めが基になっているかもしれません。畑の残った部分は、貧しい者、やもめ、みなし児のために残しておくべきであるという戒めです。つまり、主イエスはご自分の恵みがここにいる群衆に留まらず、それ以外の人々にももたらされることを願っておられたと言えるでしょう。主イエスの裂かれる肉、流される血が少しも無駄になることがないように、世界の隅々まで福音が宣べ伝えられなくてはならない。「十二の籠」とは、イスラエル十二部族を象徴的に表していると思われます。イスラエル全体に、延いては全世界にこの恵みはもたらされなければならない。

人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来るべき預言者である」と言った。イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、独りでまた山に退かれた。(6:14-15)

5つのパンと2匹の魚という、ごく僅かなもので1万人の群衆を養われた奇跡を見て、群衆は狂喜しました。イエスに対して更なる期待が膨らんだのです。この人であれば、自分たちの生活を立て直してくれるかもしれない。当時の政治に不満を抱いていた人々は、一斉にイエスを「政治家」に仕立てようとし始めました。ここで彼らがイエスを「預言者」と呼んでいる点に注目しましょう。メシアそのものとは言われていませんが、それに等しい権威を持つ人物として認めたのです。彼らがイエスを「預言者」と呼んだ背景には、申命記に出てくる「モーセのような預言者」という表現があるようです。

**あなたの神、主は、あなたの中から、あなたの同胞の中から、私のような預言者をあなたのために立てられる。あなたがたは彼に聞き従わなければならない。**

彼らがイエスを「預言者」と呼んだことは、一面において正しく、一面において間違っていました。モーセは民をエジプトから解放し、荒野で導きました。主イエスはそのように真の解放者、真の導き手であった。しかし、彼らはイエスを「罪より解放するため、ご自分のいのちを与える神の子」であるというところまでは認識できなかったのです。

### 【結論】

主イエスは、霊的な真理を理解させるに先立って、まず彼らの肉の必要を満たされました。主の思いは、実はその先にあったのです。彼らが一同に会して食事をするところに、主イエスを中心とした霊的な共同体が形成されているということを悟ることを求められました。しかし、彼らはその最も重要な真理にふれる前の段階に留まってしまったのです。彼らは腹が満たされたら、それで満足してしまいました。肉の満たしの中に霊の満たしがあるということを悟らなければなりませんでした。実際、この時には群衆も弟子たちも真理を見極めることができなかつたのです。来主日のイースター礼拝では、この箇所続きから「命のパン」という内容で語らせていただく予定です。

私たちがこれから聖餐式にあずかります。この共同の食事の意味するところを深く心に刻む時としたい。今週の金曜日は「受難日」となりますが、その日を先取りして「主の晩餐」にあずかりましょう。

### 【祈り】

霊と肉の養い主であられるイエス・キリストの父なる神様。主イエスは民の必要を知り、限りある資源でもって多くの人の腹を満たされました。しかし、その御業の背後には、旧約イスラエルを養い給うた主の愛を思い起こさせ、ご自分を通して神の家族がそこに形成されるという恵みが隠されていました。何人の人がその恵みに気づいたのでしょうか。私たちがこれから聖餐式にあずかります。ここに、主が用意してくださった契約のパンと杯を想起し、信仰を新たにいたします。陪餐者一人ひとりをご祝福してください。

### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
荒野でマナをもって、民の40年の歩みを支え給うた、父なる神の愛、  
荒涼とした地で群衆を養い、ご自身を中心とした食卓へと招き給うた、主イエス・キリストの恵み、  
絶え間なく続けられる聖餐式を、天国の饗宴と一つとなし給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。